五箇山の和紙づくり

五箇山の和紙は、五箇山地域を発祥とする伝統的な手漉き和紙です。八尾和紙や蛭谷紙など、富山県で作られる他の紙素材を含む総称となっている越中和紙の一種となっています。この和紙は、コウゾとして知られるクワの一種の靭皮に、アオイ科のトロロアオイから抽出した粘液を混ぜて作られます。この独特な混合によって、五箇山和紙は美しい見た目としなやかな感触になります。また、コウゾの靭皮の絡み合った繊維によって、丈夫で長持ちな紙が生まれます。

五箇山和紙の歴史は、加賀藩主に献上していた江戸時代（1603〜1867 年）初期まで遡ります。五箇山和紙は、江戸時代にこの地域を支配していた加賀藩の庇護のもと開発されました。この紙は藩のためのみに生産され、納められ、そして多くの場合、藩が発行する紙幣に使われました。加賀藩が支配していた頃は、紙の交易が重要な産業となっていました。五箇山和紙は主に冬季に製造され、暖かい時期には、大型の合掌造り家屋の中で絹や塩硝が作られていました。今日でも、この種の和紙は高品質素材とされ、木版画家や画家といった芸術家、さらには提灯や和傘といった商品の製造によく使われています。

現在では、五箇山を訪れた観光客は、五箇山和紙の里といった場所に立ち寄り、この独特な和紙について学ぶとともに、ワークショップに参加して、和紙づくりを直接体験することができます。シンプルな工程で、所要時間はわずか 20 分です。